

このフンザは【風の谷】として有名で、日本人(や以前は韓国人)が集まる安宿が 3 軒もあった。

そしてその 3 軒ともに夕食を用意してくれる。泊まっている宿で食べても良いし、他所の宿で夕ご飯だけ食べても良い。それぞれの宿では工夫を凝らした美味しい料理を毎日日替わりで出してくれて、食後のデザートまで付いて 60 ~ 70 ルピー(107 ~ 125 円)という格安の値段が嬉しい。



3 つの宿の主人の一人。夕食だけでなく、昼食やお茶だけでも喜んで出してくれる。

今日は日本人が 7 人。

いつものように皆でわいわいやりながら晩ご飯を食べる。この季節のフンザの夜はとても冷える。安宿なので暖房はなく、部屋の中でも 10

度くらいになってしまう。そのせいか、何時の間にか温泉の話題になった。

皆世界を旅していて、温泉に入った経験があるのだ。台湾がいいとか、インドがいいとか。

そんな時、宿の人が、この近くに温泉があると言う。

温泉卵も出来るし、砂風呂もあるという。

そう言えば、宿に置いてある情報ノートに温泉の事が書かれていたのを読んだ。

【風の谷のナウシカ 第八巻】で、ナウシカが全裸で入るシーンが出てくるが、それはどうやらこの温泉らしい(すみません、これは嘘です。第七巻までしかありません。ちょっとイスラムが長いもので・・・)。

ところで私は神奈川県を代表する根っからの温泉通である。この機会を逃す訳には行かない。

早速温泉ツアーを企画し、他の 6 人へ得々と働きかける私。

何時の間にか、“隊長”と呼ばれていた。

## 温泉へ行こう

翌日、温泉行きの車をチャーターする。と言ってもスズキである。

8 キロと聞いていたが、40 分ぐらい掛かった。宿からは恐らく 20 キロ弱はあったと思う。スズキは軽トラの改造なので、隙間から風が吹きぬけ、さらに体が冷えてくる。温泉にはうってつけの状況になってきた。

到着したのはのんびりとした村、というか、小さい集落で、観光客など全く来ない様な場所であった。畑には小さいりんごがなっていたりする。

運転手との交渉では、そこで下ろしてもらい、我々は自力で温泉に向かう事になっていたのだが、運転手が案内してくれるという。さらに運転手の友人二人がたまたま歩いていて、合計三人のパキスタン人も一緒に温泉へ行く事に。現地の人でも好んで行くぐらいの温泉なのか、とその時は思

っていた。

我々は集落の細道を縫うように歩いていった。

川が見える。フンザ川だ。この川はやがてギルギット川となり、そしてインダス川となる。

そうインダス文明のインダス川である。

まさに大河の一滴。

インド洋に注ぐインダス川は大河という感じだが、インド洋まで 1000 キロ以上あるフンザ川は、まだ川幅 5~7 メートルの小さなものである。しかし 7 千メートル級の山々から流れる水は豊富で、急斜面をかなりの勢いで流れていく。

その水は、大地を削り、この集落のあたりでは、幅 200 メートルくらいの渓谷を作り出している。この土地は砂地の為、とても削れやすく、川は集落から 50 メートル下を流れているのだ。

対岸には、紅葉が実にきれいで、眼下には川。

実に眺めがいい。

『こんな場所をのんびり歩いて眺めのいい所で温泉なんていいね』とウキウキ気分の我々。

しかし、案内役のパキスタン人が、

『温泉は川沿い』とポツリ。

なっ、なっ、何とこの直角に切りだった崖の下かい。



対岸の紅葉。崖の下にはフンザ川。この川はやがてギルギット川、インダス川と名前が変わってインド洋にそそぐ。

ここは崖しかないでの、ここからどのくらい迂回すれば下に着くのかかわからないが、私は川崎市を代表する根っからのハイカーである。私は何でもない。楽勝だ。

まあ、崖の下といっても高度差はたったの 50 メートル程度であり、何度も書くが、私は楽勝だけれども、もし一人でも『たいへんだー』と言ったら、隊長としてツアーの即刻中止決定をすべきだと思っていた。

一応、耳をダンボのようにしてみたが、誰も嫌がっている様子はない。さすが私の隊員達である。全く乗り気である。

『崖の下だと景色は今一つだね』とか、『ここは空気が薄いから疲れやすいね』とか、『帰りは登りで明日は筋肉痛だろうね』とか言って、隊員達の本音を探ってみたが、以前として皆はまだ乗り気である。

思わず、“ハァー”とため息、いやいや深い呼吸活動によって精神を集中させた。

ふと気づいてみると、7 人の日本人の中で、サンダルは私一人。

行きしなにスズキの中で、『温泉なんだから私もサンダルにすれば良かった』と言っていた女性も、迷った末に靴にしていた。

私は迷わずサンダル。経験豊かな私は問題ないが、もし隊員の誰か一人でもサンダルなら、即刻『出直そう』と宣言した所であるが、宣言しないで済んだようだ。ガッカリ、いやいやホットした。

皆が靴の紐を締め直している。やる事のない私も時計のバンドを締め直しながら、『おお、もう3時過ぎか、こりゃー寒くなってくるなー』と最後のあがき、いやいや、隊長としてタイムスケジュールを把握しておいた。

私は川崎市多摩区を代表する根っからのトレッカーである。何キロ迂回しようと私は全然問題ない。

しかし、案内役のパキスタン人が、

『じゃあ、ここから降りるよ』とポツリ。

何と、迂回するのではなく、崖を下るのかい。

彼らは日本人の補佐役で来てくれていたのだった。

崖なので、この先にどんな道が待ち構えているのかわからない。

7人の日本人の内、女性は二人。男性はみな若い。一人は高所恐怖症である。

隊員の一人でも『怖い』と言い出したら、即刻『中止』と宣言した所であるが、まだ皆は乗り気である。

どうやら宣言しないで済んだようだ。ガクッと肩を落とし、いやいや肩を中心に軽く体操してみた。



崖をちょっと降りた場所。この先は人がやっと一人通れるくらいの道？が続く。

ふと気づいてみると、隊員達はリュックなんか背負っている。温泉セットをビニール袋に入れているのは私一人。サンダルにビニール袋、まるで温泉に行く格好だ(ってやっぱり温泉に行くだよな)。

すごい崖を下ろうってのに片手がふさがっている。しかし私は川崎市多摩区長尾を代表する根っからの登山家である。私は経験豊かな隊長なので表面上何とも無い。

しかし、ちょっと下ると、もう人が一人やっと通れる崖の道で、この一帯はどこまで降りてもやはり砂利道で、砂利は滑るし、山側の壁に手をつくるとポロポロと崩れるので、はっきり言ってそこから落ちたら即死。私以外の隊員には厳しい状況である。

『これは尋常でなくヤバイぞ』

一番温泉に行きたい隊長の私がもう中止したい、いや、これほど隊員達の身の安全を心配している気持ちをパキスタン人3人に視線を送る。

そうなのだ。ここを知っているパキスタン人だからこそ、こういう道に不慣れな日本人をこんな危険な目にあわせてはいけない。

『やはりあなた達には厳しいかもしれないが、どうしますか？』  
などとお伺いをたてるべきであり、もし現地人からそう言われれば、隊長の私も、即刻、  
『了解。ここはやめよう』と宣言できるというものである。  
そんな私の熱い視線を感じ、一人のパキスタン人がようやく口を開く。  
『スローリー、ノープロブレム』  
うれしくて泣きそうだ。

この場所は恐らくまだ標高が 2000 メートルである。酸素が薄い。時々フラツときたりする。  
私は川崎市多摩区長尾 7 丁目を代表する根っからのクライマーであるので問題ないが、隊員達の  
身を心配してクライ寸前でもある。ダジャレが出るほど空気が薄い。  
はっきり言うと、心配のあまり、最後尾の私はだんだんと皆から離れ気味である。遠くから見守  
るのも隊長の仕事だ。

高所恐怖症の男性は、歩く、というよりは、もう座りながら降りていく。すっかり腰が引けてい  
てもうズボンの尻は、砂だらけになっていて可哀想ですらある。

岩盤が砂地で、時々石が交じっている。砂地の  
壁に手をつくるとぼろぼろ来るので、できるだけ  
石を掴みながら歩く。さすがに地元の方は時々  
歩くのだろう、手をつきやすい所には磨かれた  
手ごろな大きさの石があって、これを掴みなが  
らであれば・・・ポロツときた。  
全体重をかけていたらヤバかった。こんな事実  
を、小心かもしれない隊員達に伝えたら恐怖で  
先へ進めなくなるかもしれない。  
私は全然大丈夫だが、大丈夫なので、外れた石  
はそっと元へ戻しながら記憶から消し去る事に  
した。



崖の中ほど。もろい岩盤はすぐに崩れてしまう。歩くたびに細かい小石が下に落ちていく。

もう私の全身はエネルギーで満ち溢れていると言っていい。  
この難攻不落の大峡谷ロッククライミング制覇を目指す 7 人の若者の中では、エネルギーの点で  
圧倒的にかげ離れた存在である。  
高校の物理的に言い直すと、『最も位置エネルギーが大きい』と言える。  
前の隊員達が踏んだと思われる足跡を踏むと、何故かそこが崩れたりするから不思議である。  
一番最後を歩いているので、はっきり言って下を歩いている隊員達に、小石や砂を降り注ぐ事  
になるが、さすが隊長の私である。言葉を使わずに注意を与えるところがにくい。

パキスタン人三人は、再三私に『アーユーオーケー？』と声を掛けてくれる。  
何故か私だけに頻りに声を掛ける。パキスタン人には、私が隊長である事を言っていなかったが、

私の発するオーラで、私が重要人物であることを察しているようである。

こうして、日本のロッククライマー達は、ようやく全員無事に川沿いに降りた。

何故か私だけ、尻が汚れているのが気になるが、ようやく危機を脱し、川沿いに進む。

30メートルの滝があり、そこから流れる小川を渡ると温泉は近い。

ところどころ地面には白く塩の様な成分が固まっているところが現れてきた。これは大温泉の予兆である。

そしてようやく温泉に着いた。

## 風の谷の温泉

源泉から流れ出るお湯は、天然の湯船に注ぎ込んでいる。湯船は長細くなっており、その大きさは、なっとなっ何と 80 x 250 という巨大な……。単位はセンチである。

はっきり言って一人しか入れない。しかもぬるい。注ぎ込むお湯は、毎秒 30 ミリリットルというところだ。

これほど苦労してきたのに、この温泉、実にショボかった。

この崖を降りるまでに、小一時間を要しているにも関わらず、隊員達は、温泉につかる事など諦めている。



湧き出すお湯の量は季節によってだいぶ差があるらしく、この時にはこの浴槽しかお湯が溜まっていなかった。

『寒いっすねえ』と隊員の一人が言う。

『ごえるねえ』と私。団結を乱してはいけないのでそう答えたが、情熱の固まりである私はすごく暑かった。

そして私だけ、温泉に来た興奮からか、ハアハア言っているようである。

加えて、隊員達を心配するあまり、大量の汗をかいていて気持ちが悪い。

そこで私だけ温泉に入る事にした。

源泉ではゴボゴボいっているが、そこから流れてくるお湯はわずかである。そのわずかなお湯を全部湯船に流れる様に、他の支流を石でせき止めると、湯船が少しずつ温まってきた。ようやく入れる。

洋服を脱いでみるとTシャツがぐっしょり濡れていた。

『あれっ、さっきの滝で濡らしちゃたんですか?』と隊員の一人が聞く。

隊員達を心配するあまりかいた冷汗だよ、などと言っではいけない。気苦労を気苦労に見せないのが隊長だ。

『いやー、まあそれなりの運動だったからね』とつい控えめに本音を、いやいや形式的に答えておいた。

私は温まっていた体をさらに温めた訳だが、隊員達は、何故か体が冷えた、と言いながら足湯につかっていた。

この温泉は、軽く石を積み上げお湯が溜まる様にしている。とても浅く、水平に寝て入る事になる。入ってみると、湯船の底は凸型の様であった。仰向けに寝た場合、スペイン人の様に分厚い私の胸板は全部が温泉につかるのだが、不思議な事にへその回りだけは大気にさらされている。イスラムの国では街中で、なかなかへそ出しルックなどお目にかからないが、こんな辺境のところでへそを出すように作られているなんて実にオシャレだ。

湯船の前後に体を移動しても、常にへそが出るので、かなり高度な建築技術なのかもしれない。私が出た後は、湯船にほとんどお湯が残っていないのが不思議だった。同行のパキスタン人が瞬時に栓を抜いたと思われる。

因みに、お湯は、無味だがわずかに硫黄の臭い。透明だった気もするが、私が入ると白い濁り湯になっていた。湯ノ花と信じたいが、もしかすると、地元のおばさんが洗濯する時の石鹼かすかかもしれない。

20分ほど温泉に入り、同じ崖の道を登る。

ひたすら登る。登り切ったところで小休止。

私だけがハァハァ言って、再び汗だくでめまいもするが、温泉でかなりのぼせたせいと思われる。

難攻不落の崖の挑戦で、非訓練要員を無事に率いた私は、『隊長』から一気に格上げされ、以後『リーダー』と皆から呼ばれるようになった。因みに情報ノートを読むだけの『reader』という事は絶対はない。



帰りもやっぱり急な崖を登るしかない。でも上を見ているので、多少はました。どう見ても温泉ツアーの写真じゃないなあ。

翌日、隊員が筋肉痛だという。

確かに所詮 50 メートルとはいえ、普段使わない筋肉を使い、また転落死する危険に対し、常に全身に力を入れていたせいだろう。

まあ、私ほどに普段鍛えている訳でもなく無理もない。

その私はと言えば、当然の様にピンピンしている。

ただし、あの温泉はかなりミネラルが豊富で、どうやら湯あたりする様である。

その湯あたりは2日目ぐらいにやって来て、症状は全身の痛みという珍しいものであった。

もちろんこれはメンバー中で私だけで、温泉に入ったのも私だけで、他に何の要因もない。

よって間違いなく湯あたりと言える(証明終了)。

つづく